1 幼稚園教員の役割

1. 幼稚園教育の重要性

(1) 幼稚園教育の基本

幼児期の教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」（教育基本法）です。３歳から小学校入学までの幼児に対する幼稚園教育は、学校教育法第22条において「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と規定された目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことを基本としています。

- 環境を通して行う教育のため重要なことは次のとおりです。

  ・幼児期の発達の特性を踏まえる
  ・幼児の生活の実情に即した教育内容に基づいた計画的な環境をつくる
  ・その環境にかかわることにより幼児が主体性を発揮できるよう配慮する
  ・そのような生活を通して望ましい方向に向かって幼児の発達を促す

- 活動の主体は幼児であり、教員は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していきます。ここでいう環境とは物的な環境だけではなく、教員や友だちとのかかわりを含めた状況すべてです。幼児は、このような環境を通して自己を発揮し、健やかに発達していくことができるのです。

- 教員には、常に日々の幼児の生活する姿をとらえることが求められます。教員は、幼児が何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、何に行き詰っているのかなどをとらえる必要があり、その実態把握をふまえ、幼児の生活や発達を見通して指導の計画を立てることになります。

- 遊びを通した学びを実現するには、一人ひとりの幼児に今どのような体験が必要なのだろうかと考え、そのためにどうしたらよいかを常に工夫し、日々の保育に取り組んでいくことが重要です。

- 教員の言葉や態度、行動は幼児の安心感の源です。受容的・共感的に接するよう心がけましょう。

(2) 幼児の発達と学び

幼児期には、幼児は家庭において親しい人間関係を軸にして営まれていた生活からより広い世界に目を向け始め、**「生活の場」「他者との関係」「興味や関心」**などが急激に広がり、依存から自立に向かいます。

- 幼児は幼稚園において、教員や他の幼児たちと生活を共にしながら感動を共有し、イメージを伝え合うなど互いに影響を及ぼし合い興味や関心の幅を広げ、言葉を獲得し、表現する喜びを味わいます。また、大勢の友だちと活動する充実感や満足感をもつことによって、さらに自分の生活を広げていこうとする意欲が育てられていきます。

- 幼児は、友だちとのかかわりを通して様々な感情を体験していくことになります。友だちと一緒に活動する楽しさや喜び、また、自己主張のぶつかり合いなどによる怒り、悲しさ、寂しさなどを味わう体験を積み重ねることによって、次第に、相手も自分も互いに違う主張や感情をもった存在でもあることに気付きます。このような他者との関係の広がりは、同時に自我の形成の過程でもあります。幼児期には、自我が芽生え、自己を表出することが中心の生活から、他者とかかわり合う生活を通して、他者の存在を意識し、自己を抑制

しようとする気持ちも生まれるようになり、自我の発達の基礎が築かれていくのです。

- 生活の場が家庭から地域、幼稚園へと広がるにつれて、幼児は興味や関心を抱き、好奇心や探究心を呼び起こされるような様々な事物や現象に出会うことになります。これらの対象に対する興味や関心は、他の幼児や教員などと感動を共有したり、共にその対象にかかわって活動を展開したりすることによって、広げられ、高められていきます。

- 幼児は人やものにかかわる中で、さまざまなことに気付き、それらを広め、深めていきます。その過程で**「三つの自立」**が養われます。

  ・**「学びの自立」**・・・自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話などをよく聞いて、それを参考にして自分の思いや考えを深め、適切な方法で表現することができる

  ・**「生活上の自立」**・・生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自らよりよい生活を創り出していくことができる

  ・**「精神的な自立」**・・自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができる

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続について　～「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へ～

○幼児期－「学びの芽生え」
・楽しいことや好きなことに集中することを通じて、さまざまなことを学んでいく
・遊びにおける楽しさからくる意欲や遊びに熱中する集中心、遊びでのかかわりの中での気付きが生まれてくる

○児童期－「自覚的な学び」
・学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別がつく
・与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進める

参考：幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）

2. 幼稚園教員の役割

(1) 幼稚園教員の役割

教員は、主体的な活動を通して幼児一人ひとりが着実な発達を遂げていくために、幼児の活動の場面に応じて次のようなさまざまな役割を果たさなければなりません。

- 幼児が行っている活動の理解者としての役割
  - ・集団における幼児の活動がどのような意味をもっているのかをとらえるために、幼児一人ひとりがこれまでの生活や遊びでどのような経験をしているのか、今取り組んでいる活動はどのように展開してきたのかを把握する
  - ・幼稚園生活だけではなく、家庭との連携を図り、入園までの生活経験や毎日の降園後や登園までの家庭での様子などを把握する
  - ・自分の学級の幼児がどこで誰と何をしているのかという集団の動きを把握する

- 幼児との共同作業者、幼児と共感する者としての役割
  - ・教員が幼児に合わせて同じように動いてみたり、同じ目線に立ってものを見つめたり、共に同じものに向かってみたりすることによって、幼児の心の動きや行動が理解できる
  - ・教員と一緒にできる楽しさから幼児の活動が活性化し、さらに活動への集中を生むことへとつながっていく

- 憧れを形成するモデルとしての役割
  - ・教員が活動を楽しみ、集中して取り組む姿を見せることにより、「先生のようにやってみたい」という幼児の思いが、事物との新たな出会いを生み出したり、工夫して遊びに取り組んだりすることを促す

・教員の日々の言動は、善悪の判断、いたわりや思いやりなど道徳性を培う上でも、一つのモデルとしての大きな役割を果たしている

- 遊びの援助者としての役割
  - ・幼児の遊びが深まっていかなかったり、課題を抱えたりしているときの援助
    - ➢ いつどのような援助を行うかは状況に応じて判断することが重要
    - ➢ 教員は幼児が自ら工夫してやろうとしたり、友だちと助け合ったりする機会となるような意図をもって援助することが重要
    - ➢ 幼児の状況を踏まえ、教員がすべてを手伝うのか、ヒントを与えるだけにとどめるのか、また、いつまで援助するのかなどを考えなければならない
  - ・一人ひとりの発達に応じた援助のタイミングや援助の仕方を考えることが、自立心を養い、ひいては幼児の生きる力を育てていくことになる

(2) 幼稚園教員の一日

出　勤：

朝は、保育室の点検や換気をするなどの準備や環境作りをすることで、保育に向かう心構えをつくります。

登　園：

登園時の幼児とのかかわりは、一日の保育を左右すると言っても過言ではありません。登園方法は園によって異なりますが、教員・保護者・幼児にとって、清々しい一日の始まりにしたいものです。幼児は憧れの先生との朝一番の出会いを楽しみにしています。気持ちの良い挨拶で一日を始めましょう。

昼　食：

お弁当や給食など、昼食の取り方も園によって様々です。食事のマナーやルールを守ることも大切ですが、幼児の様子を感じ取ることも重要です。登園時に気になった幼児や保育中に気になった幼児を観察する絶好のチャンスであることも忘れないでください。

降園後：

降園後は、職員会議や研修、学級事務、家庭との連絡など多様な仕事が予定されています。これらの仕事も教育の内容を支える重要な業務であり、この積み重ねが保育の充実につながっていきます。

3. 研修の必要性

教育という仕事を遂行するには、教員自身がその見識と人間性を高めていくとともに、幼児一人ひとりに行き届いた指導をしていくための指導技術の工夫・改善に努めることが大切です。自らの職責を自覚し、職務を適切に遂行するための教育に関する専門的知識を高める「研究」と人間性を深めていく「修養」に努めましょう。

社会の急激な変化が進んでいく中で、子どもを取り巻く状況も大きく変わり、幼稚園に対する期待が高まるとともに、保育に関する考え方や技術も刻々と変化しています。「研究」によって、変化に対応できる実践的な指導力を高めましょう。教員自身が好奇心や探究心を持ち、学ぶ楽しさや喜びを実感し、学ぶ立場から教えることをとらえ直してみることが必要です。

また、幼児の心をまるごと受けとめ理解しようとする包容力や観察力、保護者や他の教職員をはじめとする様々な人との関係を形成する力を高めるとともに、自然の変化や世の中の出来事に関心を持ち、文化や芸術に触れ、健康に気を配るなど、「修養」に努めることが必要です。